

書肆・林義端考

柳 牧 也

(一)

近世の商業出版が何時、誰の手によって始められたかを解明することは困難な問題であろう。寛永時代、すでに百一名の書肆が算出されているから、これを更に遡ってみても充分な解答は得られないであろう。中村富平は『辨疑書目録』(寛永七年刊)において、「京都書林ノ興行ハ。中野道伴ト云フ人ナリ」と述べているが、一応の参考として考えるべきであろう。がそれも正確なものではない。むしろ自然発生的とでも云うべきではないだろうか。寺院出版の販売を引き受けたり、蔵書を多く持っているところから古本屋を始めて偶々出版書肆に転ずる者もあつたらうと思ふ。

彼等近世初期の出版書肆については、その発生ばかりでなく、まだまだ不明な点が多いのだが、その性格には一つの確とした傾向があつたのではないかと想像される。出版という事業の性格から考えると、その初期にあつては当然のことであるかも知れないが、かなり高い教養と見識を持った人物が存在していたようであ

る。例えば、京都書肆の興行と云われる中野道伴であるが『辨疑書目録』は前掲の記事につづいて、

此ノ道伴ハ初メ文之^{子ニ作}之^或儒門ニ使^シ人ナリ。故ニ此ノ文之ニ因テ。始テ四書ノ植字本ヲ出ス。亦後ニ点付ノ印本ヲ以テ。四方ニ流布ス則文字点ノ四書ト称ス

と記しているのを見ても、教養の高い人物であつたと考えられる。寛永三年版の「文之点四書集註」の如竹跋には、

中野道伴翁請銀諸梓、予也所伝差訛而懼違師説、以故辞而不許、翁諒之不已、於是不得因辞云々

とあつて、中野道伴は、翁と呼ばれているのであるから、奥野氏の云われるように、「相當な社会的地位に在つたのではないか」と考へてよいであろう。道伴には道也小左衛門を始めとして一族と考へられる者が相當に書肆として存在しているから、これを後代の如き同族組織による純然たる営利書肆としてみることも可能であらうが、それと同時に道伴のごとき可成りの社会的地位を持つていたと思われる人物の存在からして、ある見識の下に書肆となつたのではないかと考えるべきではあるまいか。又『松台雜録』

には、

御書物師出雲寺源七郎先祖林和泉掾（林道春之内縁有之初は町人のよし）書物問屋と申にて無之好て書籍類夥敷所持致し権現様台徳院様御代林道春内縁を以御用相勤二代目と泉寺殊菴大猷院様より林道春内縁推挙を以御書籍御用相勤当源七郎迄連綿相統致候家筋也

という記事がある。これに依れば、京都書肆の老舗の一に数えられる松柏堂出雲寺和泉掾は営利のために書肆となったのではなく、林家の姻戚関係とその夥しき蔵書の故に、書肆たるべく命ぜられたと云つてもいいであろう。漢籍、あるいは歴史書、延喜式・居家必用・装束図式などの一連の出版書、あるいは江戸出版における武鑑の刊行などを見るならば、出雲寺の性格は明らかであろう。出雲寺は林道春と姻戚関係にあったが、もう一人姻族がいる。荒川宗長がそれである。『羅山先生文集』（寛文三年刊）の春

奔跋に、乃使姻族荒川宗長刻梓於京洛歷年而劖劖既成云々
とあることよつて明らかであろう。

今のわたしは中野道伴・出雲寺和泉掾・荒川宗長の三人を挙げ得るに過ぎないが、初期の商業書肆を克明に調査してゆくならば、彼等と同じような性格を持った書肆がまだまだいることだろう。高い教養と、かなりの名族であること——これが初期書肆の共通した性格であつたのではないかと考えられる。勿論、僅か三人の例を挙げて論断することは出来ないけれども、新興の出版事業がようやく黎明期を迎えた近世庶民文化の発展の上で重要な義

務を費わされていたことを考えるならば、当然推定されるであろう。従つて、この事業にたづさわる彼等には高い見識を持つて、庶民に文化を普及し、啓蒙しようとする意欲の方が営利を云々する以上に重大なことであつたに違いない。このことが、元祿以降の商業書肆と基本的に相違する点ではないかと考えられる。^(註4)

(二)

知識の啓蒙・普及に忙しかつた近世初期の風土にも、ようやく娯楽作品を楽しむほどの余裕が出来てくると、仮名草子の売行きもぐんと増えて来た。朝山意林庵の『清水物語』（寛永十五年刊）なぞは二、三千部も売れるという有様だつた。そうなると当然出版も営利事業としての形をととのえてくる。当時の商業出版がどの程度に確立していたかは明らかにされていないが、それにしてもこれらの営利事業が本当にその形態を整えてくるのは西鶴の『一代男』刊行以降のことではあるまいか。『清水物語』とてもその準備期・胎動期の現象としてみるべきであろう。『一代男』が荒砥屋孫兵衛なる者の手によつて刊行せられたには西鶴個人の事情があつたと見るべきであるかも知れないが、書肆がこれに目を付けたのはまだ営利事業としての書肆の確立が充分に確認されていなかったからだと考えられはしないだろうか。『一代男』が好評を博するや否や『二代男』が『世の慰草』と表明した上で続刊されたり、はては西鶴以外の作者によつて『三代男』まで刊行された事情を思い合はせるならば、このことは納得出来る

と思う。つまり、出版事業は西鶴の出現によって、はじめて営利事業として、商業出版として充分採算の合うことを知ったと云っても良いであろう。かくして確立された商業出版はまことに目ざましい勢いで拡張されていったのである。『好色一代男』の好評は、この作品自体の再版・三版、あるいは絵本として遠く江戸までたちまちの間に普及していったが、それと同時に、『好色二代男』を始めとする『好色々々』と称する所謂好色本の盛行を招いた。

好色本世々にひろく、難波津には西鶴一代男より書染、去年清月の比、新色五巻書迄の色草紙指をるにいとまなし。(註6)
という状態だった。これを裏返して、書肆の側から云わせるならば、

当世は只硬い書物を取置て、あきなひの勝手には、好色本か重宝記の類が増じや。(註7)

と云うことになる。利潤を追求する商業書肆の要請が作者を束縛しようとするのは当然であろう。「指をるにいとま」のない程の好色本の流行は所詮、「好色本か重宝記の類が増じや」という書肆の当然な要求によって生まれて来たのである。『元祿太平記』の伝える池野屋二郎右衛門(池田屋三郎右衛門)と西鶴に関する逸話は、その事実の有無を問わないとしても、この間の事情をよく説明しているであろう。『好色浮世羅』六冊を西鶴に依頼し、前銀三百匁を渡したものの、西鶴は約束を果さないままに歿した、というのであるが、書肆の好みは充分に示されている。この記事の「半年程引しろふ内に西鶴此世を去り云々」とあるのは、『浮世羅』依頼後半年、の意味にとるべきであろうが、とするならば、

晩年、暗くみじめな中下層町人の世界に鋭い観察と同情の眼を放っていた西鶴に好色本の依頼をするのは見当違いである。これでは西鶴も「草按を仕直す」とか云って延引せざるを得ないであろう。池田屋といえば、『好色二代男』や『好色一代女』を刊行した書肆であるが、それだけに西鶴の好色物に味をしめて、『浮世羅』の執筆を依頼したものであろう。彼等書肆はあくまでも営利中心に作家を襲っていたのである。

このようにして刊行せられた好色本を始めとする浮世草子はさまざまな方法で広く読者を獲得していった。小間物売による小説の販売も新しい一つの普及方法であつたらう。

……わかいこたちのお手のだうぐきはすみ、かけがうやたきもの、をだはらうみらうすみふで、かりがねのぶん七や、そねさきのおはつがしんぢうあざうしそらねてさせぬさあさあめせめせ云々。(註8)

とか、

……おはながみ袋香包、ふくさ香箱たとう紙、おしろいまゆはき紅やはり、好色本上るり本、御望次第めしませと云々。(註9)

と諸書に記されているように、小間物売の手によつても、好色本は売り弘められていったわけである。書肆・作者・読者の三者が共に好色本に夢中になってくる。そうなれば、

新板どしどし板行するといへ共、いづれか思ひ付おなじことにて、皆板がへしの如し、さるほどに作者の知恵もかはらぬもの。(註10)

と冷評されるような粗製乱造に陥ち入ることもあつたであろう

し、又作者私底を歎かなくてはならなくなったでもあろう。西鶴以後の小説界に群小作家が続々と登場してくるのもそうした理由であつたろうと思われる。その中には本屋作者と呼ばれる一群の作者達もいた。本主に作家意識から創作した場合もあつたかも知れないが、彼等の多くは、増大する需要に追いつこうとする苦肉の策であつたに違いないのだ。『好色三代男』などの作者と推定される嘯松子西村市郎衛門や山の八と称して好色本を書きなぐつた山本八左衛門、さらに時代を下つて、一風西沢九左衛門、八文字屋本の自笑・其碩など、本屋作者の例は多い。彼等の多くが好色本、あるいはそれに近い娯楽作品を書きまくっているという事実にも、西鶴以来流行をきたした好色本と、その利益を濡手に粟と狙う書肆の商策、あるいはその需要のためには一人二役の活躍まで辞さない本屋作者の關係がうかがわれるであらう。

(三)

都の錦の『元祿太平記』巻六の「書林の中で学者たづぬる」に、神道は山崎流にて武村市兵衛、儒者は伊藤素安の高弟林九兵衛・伊藤源助門弟教来寺弥兵衛・蔭山源七門弟金屋長兵衛にて候。

という記事がある。同時代の、しかも同じ京都で生活していた都の錦の言説には可成りの信憑性があると見てもいいであらう。水

谷不倒氏は、

堅くるしい仁斎門であるよりも、融通の利く素安の弟子であつた方が相応しくはないだろうか。其れで彼れは戯作をも試みたといふ事になる。^(註11)
と述べておられるし、『江戸文学辞典』にも『元祿太平記』によつて、

同時代同地に居た都の錦の言を信すべきであらう。

とされている。が林義端は儒を古義堂に学んだ形跡が多く残されている。『諸家人物志』をはじめとして、『慶長書賈集覽』に至る諸書が義端を仁斎門としているのは、何れの資料によつたものか分らないが、信用してもいいのではないだろうか。水谷不倒氏の説は素安門と戯作とを簡単に結びつけているが、これが全くの想像説であることは中村幸彦氏の「古義堂の小説家達」や「近世儒者の文学観」^(註12)などの諸論文を一読すれば明らかであらう。そこで、今しばらく義端と古義堂との結びつきを考えてみたい。

宝永四年、『古学先生碇銘行状』一卷が刊行せられた。版元は文会堂林義端である。本書は、

- (1) 古学先生伊藤君碇銘 北村可昌
- (2) 先府君古学先生行状 長胤
- (3) 古学先生伊藤君碇銘状附録 可昌・義方・漫甫・茂卿などの追悼文
- (4) 古学先生碇銘行状跋

から成つていて、勿論仁斎の追悼集であるが、その跋文は他ならぬ義端によつて記されているのである。彼はその中で、

僕嘗学于其門、先生不_レ以_レ愚賤_ニ棄_ニ、諄諄教誘、有時談及_ニ古今典籍、撰述得失、則未_レ嘗不_ニ欣然前_レ席、明弁詳告_ニ也、德音在_レ耳、不_レ忘_ニ于懷、追慕之余、敬受_ニ碣銘行狀_ニ、捧誦_ニ弥_レ日、益感_ニ旧恩、同門惜_ニ其不_ニ三_レ広伝_ニ、亟勸_ニ寿_レ梨、遂不_レ得_ニ已_レ、一_レ時蒙_ニ英、寄贈_ニ祭_レ輓、篇什煩多、不_レ遑_ニ悉_レ取、姑録_ニ數首、附_ニ于卷後_ニ、余_レ俟_ニ他日_ニ耳、云々

と記して、仁斉の徳を慕っている。勿論、一度ばかり講筵に列して門人を称した輩もいたであらうし、あちこちの学問所に入出入していた連中もいたであらうから、義端の素安門説を一概に否定することは出来ないが、『古学先生碣銘行狀』の刊行とその跋文という一事を見ても、義端と古義堂との関係は無視することが出来ないであらう。義端の云う「僕嘗学于其門」は信頼すべきであらうが、では何時古義堂の門をくぐったか、となると問題はありそうである。天理図書館に所蔵されている古義堂の門人帳の一「諸生納札志」によると、その貞享二年の条に林九兵衛が増井左平太なる人物の紹介で入門していることが見える。正確な日付は分らないが、六月廿日から十一月八日までの間である。増井左平太が一体何者であるかわたしには全く分らないが、この林九兵衛を通じて称九兵衛といつた林義端と解してもいいのだろうか。「諸生納札志」によると、林九兵衛は元禄六年五月十日の条に加賀の町人坂尻八良兵衛の紹介者として再び登場する。この紹介者林九兵衛をさきの林氏と同一人物とするならば、林九兵衛なる人物はただの一度だけ講筵に列らなかつたままで姿を消してしまうような似非人ではないわけであるが、果してこの林九兵衛を義端と解している

かどうか問題があらう。と云うも、入門時の林九兵衛には「兩替屋也」と註されているからである。義端はそもそも兩替屋であったのだらうか。それともこの林九兵衛は義端と別人なのだらうか。これを証する何等の資料もわたしは持たない。このことは後述するとして、一応ここで林九兵衛即義端として論を進めてゆきたい。

義端が貞享二年に古義堂の門をくぐり、元禄六年には新人の紹介までしているとするならば、『古学先生碣銘行狀』の刊行を引き受け、さらにはその跋文まで記して、「僕嘗学于其門」と云つたとしても不思議ではないであらう。その間にも義端と古義堂との関係を示す資料はまだ拾うことが出来る。

彼は元禄十一年に『本朝文粹』以来の快挙と自負して、『榊桑名賢文集』を、続いて宝永元年にはその続編『榊桑名賢詩集』を編集し、刊行しているが、その両書を見ると、仁斉・東涯の詩文が圧倒的に多い。これなども彼と古義堂との関係を暗示しているものであらう。さらに『紹述先生文集』によると、

春仲文会堂席上作

嗣_下林九成遊_上鴨河小棧_上韻_上

次_三九成韻_一

十一月五日林九成招若水眞所親長特甫良致時宛岡玄昌從_三先生_二到

など義端との交渉を示す詩篇が残されている。その日時を知ることとは出来ないけれども、ともかく、義端は古義門にあって、彼等と深く結びついていたと云えるであらう。後述するけれども、防州徳山の藩主毛利元次が参観の途中大坂で東涯兄弟に会った時も義端は同行している。以上の如き、東涯との交渉以上に重要と考

えられるのは『紹述先生文集』巻之五に残されている「文会堂記」一篇であろう。

(四)

一体、文会堂林義端の処女出版は何時のことであつたらうか。わたしの寡聞の故かも知れないが、元祿五年正月に刊行せられた浅井了意の遺作『狗張子』であるらしく思われる。『慶長書寶集覧』にもこれを処女出版の如くに記している。元祿三年正月十五日の了意序を持った本書は、寛文六年の『御伽婢子』の続編として書かれたものであるが、了意が翌四年の正月に歿したので、義端は同四年十一月に序文を記した。彼は、

読もの細かに翫ば、唯其見聞を広く談話を資るのみにあらず。
兼て勸善懲惡の益あらん云々(龍尾)

と考へて、了意を讃える序文を附してこれを刊行したのである。その序の中にも義端の書肆としての性格を物語るものがあるであろう。そしてこれが義端の処女出版であるとするならば、書肆としての義端を考察する上には重要なことであるに違いない。

了意が元祿四年正月に歿し、その年の十一月に義端が『狗張子』の序を記して翌五年正月に刊行した。つまり、義端が『狗張子』刊行を企画したのが元祿四年中であつたこと、しかも「勸善懲惡の益あらん」と気負つた姿勢で刊行を企てたことは注意していい。と云うのも東涯が義端から「文会堂記」を求められたのが元祿四年五月のことであつたから。この場合の堂号がたんに義端の居を示すものであるか、あるいは書肆としてのそれであるかは

にわかに決めることは出来ないけれども、義端の刊行した書籍には殆んど文会堂林九兵衛、と記されているところを見ると、これを書肆としてのそれであると考えてもいいと思われ、東涯の「文会堂記」もそれと暗示しているようである。

今也道明上下而自列侯群牧至閭閻鄙俚之賤、知下学之不可レ不レ為レ而堯舜孔孟之必不可レ師也嗚呼矣哉太平之化於斯為レ美今林九成之以文会堂為レ其楣一也人固非レ顯事亦弗レ著然其所レ為出乎為学則文化之下及可レ推而知一是予之所レ以記文会堂之堂弗敢拒其請也若夫事顯人著而閔世教之隆汗則有司存云々

と東涯は述べている。「其所為出乎為学則文以下及可推而知」という一文によつてみても、文会堂が書肆としての堂号であることが想像されるし、この一文を乞うた義端の目的が推定出来ると思ふ。「文会堂記」は統いて義端が世人は市道を賤しとするが、公卿士大夫とても保身・あるいは出世を求めめる市者ではないか、「世之人唯賤其名市井而不レ知責其心之市井」ではないか、という昂然とした気概を持つていたことを記している。これだけの心意気が「文会堂記」に伝えられているのは、この「堂記」を乞うた元祿四年の義端に一つの転機が訪れていたのだと考えるのは無理であろうか。そしてそれを『狗張子』の刊行と結びつけることは暴論に過ぎるであろうか。

さきに引用した『柳桑名賢文集』の自序にこういう一節がある。

僕姿稟凡庸有嗜書癖遂業入書林

と。これを素直に読むならば、家業として林家が書肆を営んでいたのではないことは勿論、營利事業として書肆をその職に選んだものでないことも明瞭である。むしろ読書癖が蓄じて書肆になったというよりも、求学のはてに激しい意欲を持って書肆の世界に飛び込んだという告白と読み取れはしないだろうか。この一節は「文会堂記」に記された義端の気概に通ずるものであろう。このように「文会堂記」や『名賢文集』の序を考えてくるならば、『諸生納礼志』の疑問も氷解してくるであろう。わたしは不明のまままで林九兵衛と義端を同一人物視したのであるが、以上の考察からすれば、これを同一人物視しても決して不都合ではあるまい。義端がかつて兩替屋であったという確実な資料を得ない限り断定すべきではないかも知れないが、『狗張子』が処女出版らしく考えられること、それと同時に東涯から得た「文会記堂」の記述が書肆としての出発を祝したものでらしく、又義端にもそれらしき気概の見られること、あるいは『名賢文集』の自序等から、かつては兩替商であった義端が、元祿四年を転機として書肆の世界に入ったものだと推定したい。^(註16)

古義堂門にあって儒学の研鑽を致む一方、義端は書肆として、当初「狗張子」の刊行時に自ら記した「勸善懲惡の益あらん」というような啓蒙的な態度を持し続けた。これは彼にとって当然であつたらう。都の錦によつても書肆仲間の学者と目されていた義端が例の好色本作者の仲間に入ることは考えられない。『塩鉄論』の読後評を記したり、漢詩の応酬をしていた義端、書肆としての崇高な使命を感じていたらしい義端にしてみれば彼等好色本作者

達は論外の賤者であつたらう。義端自ら筆を取つた作品は元祿八年の『玉櫛笥』、翌九年の続篇『玉笥木』などが数えられる。正徳二年の『当世智恵鑑』は従来義端の作品と考えられていたが、野間光辰氏の説によつて義端作にあらざるものと考へるべきである。^(註17) それにしても『玉櫛笥』・『玉笥木』に共通して云えることは『狗張子』的な怪異小説であり、その態度が教訓的であることだろう。この義端戯作について論ずる必要はないであろうが、ただ『狗張子』との関係については一言すべきかも知れない。つまり、元祿四年、了意の遺稿『狗張子』を刊行したことによつて、彼はその影響を受けて『狗張子』流の作品を書いたのだと考へることは誤りではないか、ということである。さきに見て来たような義端の立場を考へるならば、『狗張子』と彼との関係は従来考へられているような『狗張子』の影響を云々すべきではなく、その逆に、『玉櫛笥』の如き作品を書こうとしていた義端であつたからこそ『狗張子』の刊行を企てたのではないかと考へるべきである。『御伽婢子』刊行の寛文六年ならばいざ知らず、好色本全盛の元祿初期にあって、なおかつ「勸善懲惡の益」があると思われる『狗張子』だつたからこそ、義端はおのれの求めるものを採り得たような気持で刊行に乗り出したのではなかつたか。

義端の戯作に対する態度がこのようなものであつた以上、文会堂から刊行される書籍にも彼の意欲は充分にうかがえるであらう。さきに述べた元祿十一年の『榎桑名賢文集』やその続篇である宝永元年の『榎桑名賢詩集』にしても、その自序に彼の意欲込みがうかがわれる。『本朝文粹』に次ぐものだと自負し、

中古缺典繇此流行而文華益隆不亦一大快事乎

と云う義端には戯作者などという賤称も、商業書肆という言葉も当てはまらないであらう。高い理想を持った一人の文化人としての義端をそこに見ることが出来る。

こうしたアンソロジーばかりでなく、義端は元祿八年に『文法授幼抄』を、元祿十四年には『文林良材』を刊行している。『文法授幼抄』は詩文作法書であるが、その序で義端は、

予十年前得此書於友人許不知何人所著也……

……恐其終紛失一淨写以付副嗣氏云々

と述べている。管見に入った早大本は卷之六を欠いて刊記、跋文の有無が知られないが、序のこうした書き振りから推すならば義端の著作の一と考えてもいであらう。詩文作法書の作者として推定しても義端は少しも不思議ではない。藤井乙男氏は「元祿時代の京都小説家」^(註18)で、これを義端の著作として挙げておられるが、誤りないと思う。元祿十四年の『文林良材』もその書名が示すように、『授幼抄』と同じ作法書であるが、序・署名を欠いて何人の著作とも知れない。水谷不倒氏は『列伝体小説史』でこれを義端の作と断定しておられるが、『授幼抄』を義端作とするならば、そう考えるのも当然であらう。

以上の諸点からするならば、義端には当時全盛の好色本にまどわされることのない教養と見識のあったことが知られるであろう。元祿期の一本屋作者だとして片附けてしまうには余りにも他の書肆と異なっていた。この義端の文化普及と啓蒙に対する熱意とをよく示している例として一地方文化と彼義端との交渉につい

て述べてみよう。

(五)

防州徳山第三代の藩主元次は学問好きな人物であった。彼は藩祖就隆の子として生まれたが妾腹であったために、元祿三年、異母弟元賢のあとを継いで三代目の藩主となった。彼は政治的には不幸で、正徳五年五月に領内の松樹盗伐事件から宗家吉元と衝突し、これが因となって同六年四月十三日に所領を没収され、戸沢上野介正庸におあづけとなった。『徳川実紀』には「其身年頃の行ひよろしからず。政務もあしざまなれば其罪軽からず」と記されているけれども、事実か否かの断言は出来ないと思う。幕府の巧妙な取つづし政策にひかかったと云うべきであらうか。彼は享保四年五月二十八日に許され、その所領は百次郎元翳が継ぐことになったが、「元次はそのとき別邸に住しめ。よろづつしみて。」^(註19)元次が家の政にはあづからしむべからず云々」と釘をさされ、失意のまま翌六年十一月に歿した。

政治的には不幸な四十九才の生涯を閉じた元次であったが、彼は学問を奨励し、彼自身も文学を愛した人物であった。元祿十三年九月、彼は藩士藤井五郎右衛門を学問のため京都に上らせた。

「壹ヶ年銀八百匁被遣此外書物一切御買立御貸下書物損料借等之入目申出次第御用被仰付候」という程の熱の入れ方だったが、この藤井は学問をせず元祿十五年欠落してしまった。このため藤井の代りに長沼常庵・水津寿仙が京に上ることになった。『徳山藩再興史』には元祿十三年、長沼等を藤井とともに派遣したように説

いているが、疑問とすべきであろう。水津寿仙については知るところがないが、長沼常庵は初め道如、次いで常庵、のちに玄珍と号した御馬廻医師で元禄十二年八月に十人扶持を与えられている。『徳山名士墳墓掃苔録』によると、元禄十七年の参観時に供をして東上し、そのまま京に止まって学問に励み、享保七年九月に徳山に帰って来ている。この長沼玄珍が義端と徳山の地を結ぶ縁の役を務めたものと考えられる。

さて、藩士を学問のために京へ遣わしていた藩主元次はここで京都の碩学東涯を徳山の地に招こうとした。が彼が応じなかったためにその弟梅宇を招聘することとなった。それは恐らく宝永三年のことであつたらう。この間の消息は『先哲叢談』続篇に

侯(元次)最も仁斉の學術を信じ、東涯を徵聘すれども応ぜず、侯懇請して息まず、故に梅宇をして之に代らしむ

と伝えている。岩波文庫『見聞談叢』の解説で亀井伸明氏は梅宇が徳山に筈仕したのを正徳五年の如くに記しておられる。これは東涯の『日乗』正徳五年十月五日の条や『紹述先生集』巻二に正徳乙未(五年)の「贈仲弟之徳山序」があるからであるが、事実ではない。宝永五年に刊行された『塩鉄論』の長胤跋文にすでに「願替及予廩三弟長英」と記されているし、他にも正徳五年筈仕説を否定すべき資料はある。『先哲叢談』続篇に云うように、

猶堀河に在り、時々徳山に往來するのみにして其餽廩を受くといった生活であつたと考えられるから、正徳五年十月の記事は「時々徳山に往來」したことを示していると解すべきであろう。

『徳山略記』宝永四年六月の条には

京都儒者伊藤源藏弟同重蔵江五人扶持被下置後年学父弥相助御用被召仕候節御了簡可被旨被仰渡候

という記事があるが、その後も梅宇は正徳元年韓使来聘し、元次が館伴使を命ぜられた時に文翰の事を掌つたりして、享保二年の春まで仕えている。亀井氏は梅宇の学問的意義を重視してはならぬ、と説かれるが^(註21)彼の筈仕した期間が長かつただけに、

徳山の地、文学の士、未だ甚だ多くあらず、梅宇此に仕ふるに及び、経史の業に従事する者、踈蹠して進むと云ふ

と記す『先哲叢談』続篇の記事は信用すべきであろう。徳山藩に對する梅宇、ひいては堀河学派の影響は見逃してはなるまい。西鶴のもっとも早い伝記を伝えた『見聞談叢』の著者梅宇がこの徳山の地と義端との間にいることは興味深い。

梅宇を招いて学問を奨励する一方、自ら棲息堂と称する学堂に^(註22)あつて詩文を綴つていた元次は宝永三年『徳山名勝』なる一書を編んだ。元次以下藩士達による徳山の名勝を叙した文集であるが、この序は同年四月、長胤に依頼された。そして五月、『徳山名勝』一冊が刊行された。それは義端の手によつてである。といつても、これが義端と元次との最初の出会いはなかつた。宝永元年に義端が編纂・刊行した『文集』の続篇『榑桑名賢詩集』の補遺に元次の「土峰」・「須磨浦」と題する二篇の詩が収められているからである。恐らく古義堂を通じて知り会つたと考えられる京都遊学中の長沼玄珍から元次の詩篇が義端の手に渡つたものと思われる。がやはり明確な結びつきはこの『徳山名勝』の刊行か

らであらう。

宝永五年春、元次は参観の途につき、大坂で東涯・梅宇兄弟に会った。それは『紹述先生文集』の記事によつて三月九日のことだったかと思われ^{註20}。『文集』には、巻之五に「徳山齋舫記」、巻之二十五に「奉和徳山毛利侯元次親茶道中高韻」としてこの時のことが記されている。この東涯兄弟の大坂行には義端も同行した。それは『徳山名勝』刊行の縁によつてであつたらう。後年、義端は『徳山雑吟』の跋文に

僕以業典籍誤許謁見過差乙罷無任喜懼往歲蒙命鑄

徳山名勝巻一

と記しているが、「誤許謁見」されたのが、この宝永五年の春、東涯達と一緒にだったことは『徳山雑吟』の記事によつて明らかである。義端は「敬題河舫」と題する詩の前書に

宝永戊子之春徳山侯將朝東都暫止大坂命使東涯子兄弟周親河舫僕之至賤亦相隨焉謹賦小律奉謝恩願之万乙云

と述べているし、長沼玄珍も

洛陽東涯子与林義端俱來見吾主於難波之旅館云々

と録している。この時、義端は「河舫住吉丸記」などを記しているし、藩士玄珍や烏山輔寛などが義端に代つて詩を詠じてもいる。元次は翌六年の四月帰途についたが、この時も義端は玄珍と會っている。『徳山雑吟』所収の「重題河舫」の詞書に、

己丑孟夏長沼丈從徳山侯之婦任來于伏見僕冒晚衝雨往而迎之とあるから、義端は玄珍と可成り親しい仲だったと考えられる。

宝永五年の参観以前から元次は張之象の註した『塩鉄論』の

刊行を考えていた。これが玄珍あたりから出た計画であつたことは徳山愚人（元次）の序を見ても明らかであるが、刊行までには時間を要した。『徳山略記』宝永四年の条に「秋塩鉄論刊行被仰付序文元次公御撰被遊候」とあるが、長胤の跋文は「宝永戊子三月日」とあり、恐らく参観の途中、大坂で會つた時に得たものである。そしてこれが刊行はその年の十二月であつた。板元はやはり林義端である。義端は「詠塩鉄論」という一文の中で、

徳山元次侯資稟甚高而務學甚篤恤民濟衆之心常存而不怠

私淑先生之道一而深有感于此一乃命僕捐資印行效書以

繼先生之志其嘉惠後學亦大矣哉

と記しているが、ここにもたんなる板元ではなくて、インテリとしての義端が浮び上つて来るのではないだろうか。

『徳山名勝』・『塩鉄論』の二書を刊行せしめた元次はさらに

宝永七年『徳山雑吟』の刊行を試みた。本書はさきの『徳山名勝』と異なつて、もっと広範囲な雑詠を集めたものであつた。仁

齊門の中島義方はそれに序して、

洛書坊林義端輯徳山侯善長号徳山愚人雜詠并諸次韻又附時

賢応命之瓊藻以為一卷名曰徳山雑吟

と述べている。義端は勿論、本書の刊行を引き受けているのであるが、この『徳山雑吟』では更に跋文をも記して、

往歲蒙命鑄徳山名勝巻二爾後敢不自量私撰其遺文輯效

編以擬統集二自侯及其府之文人詞士一至于京師諸名流長篇短韻撰華族錦固是一時之偉觀也此原出于侯好作文之余展

転蔓延遂二書一奇文傑作繼此有得者又将以梓之公于世一

と。徳山と義端はこの跋文によって見ても親しい関係にあったと云うことが出来るであろう。

以上が徳山の地と義端を結ぶ資料である。寡聞にして、この三冊以外に義端と徳山との関係を示すものがあることを知らないが、正徳元年五月、義端の歿したことを考えるならば、『徳山雜吟』の刊行を最後の交渉と見るべきであろう。もし、義端が存命していたとしても、正徳六年の御家断絶、享保二年の梅宇の致任によって、義端と徳山の関係はとだえたかも知れない。勿論、外交辞令ではあるが、義端をして「西山源公之後継^{〔註26〕}其芳躅^{〔註27〕}舎^{〔註28〕}侯而^{〔註29〕}其誰哉」とまで云わせた元次の不幸を見ることなく、義端が歿したのはあるいは幸いだったとも云えるだろう。

京都の一書肆と地方文化——これはかなり興味のある問題であるに違いない。義端と徳山の地とが交渉を持ち始めたのが何時のことであったかは分らない。わたしは一応『徳山名勝』の刊行をその時期とした。が年代が分らないけれども『古学先生文集』の卷之三に「題「徳山毛利侯所蔵画菊」の一文があるから、元次は東涯との交渉以前、すでに古義堂の影響を受けていたと考えるべきであろうか。とするならば、義端と元次の出会いももっと早い時期であったかも知像される。がともかく、両者の間が緊密になったのは徳山藩士長沼玄珍の上京後であろう。同じ堀河の学堂にあって、義端と玄珍が交友を結ぶのは自然であるし、彼等の仲の篤かったことは『徳山雜吟』所収の詩篇から想像することが出来る。^{〔註27〕}二人の交際の中から、『塩鉄論』はともかくとして、『徳山名勝』や『徳山雜吟』の如き、一地方文化の結晶が京都の書肆

義端の手によって刊行されることとなったのである。恵まれない地方文化の細々とした芽が、一遊学の士と中央の書肆とによって保たれたことは注意していいことであるが、それと同時にこうした地方文化の芽を積極的に育てようとした文化人義端の識見を忘れてはならないであろう。

(六)

義端と一地方文化の交渉に筆を用いすぎたかも知れない。がこのことは書肆義端の性格を考える上には重要であろう。すでに述べたように義端はたんなる本屋でもなければ、又西村市郎右衛門や山本八左衛門の如き商策のための本屋作者でもなかった。文化の普及と啓蒙のために堅い決意をもって書肆の世界に飛び込んだ理想主義的な人物であった。滔々たる好色本の全盛時代に、全く時流を超越するが如き毅然とした態度で、おのれの信ずる理想を完遂しようとした知識人であった。それがたまたま玄珍を知ることによって、一地方文化の支援となったのである。義端にとってはこの一地方文化を育てることがおのれの義務と考えられたかも知れない。卑猥なる時流に抗して、正しい意味での文化を守るためには、この一地方文化が義端によき責務を与えたのだと考えるべきであろう。彼の出版事業に対する自覚と徳山の文化とはこの意味で結ばれるべくして結ばれたものだと言え。『徳山名勝』以下の出版が書肆義端の性格を説明しているのである。

従って、彼義端を元祿期の一本屋作者として、嘯松子や山の八と同列に置いて、これを論じ去るのは軽率であろう。彼等本屋作

者の仲間に入れるよりも、義端はむしろ、近世初期の中野道伴などの知的書肆と同じ性格をもったものと考えざるべきである。そうした知的書肆群の最後の一人であったかも知れない。時流に背いた者としてこれを見るのは容易である。が、それでもなおかつ、高い理想と意欲を持ちつづけた知的書肆として、文化人として義端を評価することは必要であらう。

註1 奥野彦六氏『江戸時代の古版本』。但し、この百一名の中には奥野氏も述べておられるように、寺院・編者も含まれているので完全な数字ではない。

註2 『江戸時代の古版本』

註3 中野一族及びその墓所等については『慶長以来書賈集覧』所収の新村出博士の筆録を参照されたい。

註4 以上の稿は井上和雄氏『慶長以来書賈集覧』・奥野彦六氏『江戸時代の古版本』に負うところが多い。

註5 野間光辰氏は荒砥屋孫兵衛を大坂思案橋浜の砥石問屋と推定されている。荒砥屋は書肆ではなかったのである。

野間氏は『一代男』が幕府の制法に対する町人の痛烈な批判であったが故に、出版は憚られたと考えられる。『西鶴と西鶴以後』(『岩波日本文学史』第十巻所収)を参照されたい。

註6 西沢一風『御前義経記』序

註7 都の錦『元祿太平記』巻一「京と大坂に本替の沙汰」

註8 宇治加賀掾正本『雁金文七三年忌』、清川道行の段

註9 西沢一風『傾城武道桜』四之巻「傾城岡山方便のしなへ

討」

同右

註10 『列伝体小説史』

註11 『国語・国文』25・10

註12 『岩波日本文学史』第七巻所収

註13 『名賢文集』の序で義端は

……選其文以登梓者本朝文粹以遺末聞其學豈非缺典乎(中略) 姑集數十篇題曰「梅桑名賢文集 嗚呼僕固非其人」狂僭殊甚然非「敢自棟擇」及為「後世選」文者之嚆矢耳云々

註14 『狗張子』義端序

註15 『京羽二重』(貞享二年)、『京羽二重綴留』(元祿二年)の類にも林九兵衛なる名を見出すことは出来ない。ただ『国華万葉記』(元祿十年)の兩替屋の条に「大黒や九兵衛」なる人物がいるが、これが義端林九兵衛と何らかの關係を持っているのであろうか。

林家の過去帳の存在が突きとめられれば問題はもっと明白になると思われるがわたしにはその所在が分らない。ただ京三条小路の仏光寺厩に残されている林義端の墓に隣り合わせて宝永七年九月十六日林九重郎なる者の手によって建てられた梶崎英寿一族の墓が現存するが、あるいは義端と姻戚關係にあつたものであろうか。梶崎英

寿が一体何者なのかも分らないけれども、この辺りから義端の家系が明らかになればまだ問題は進展するであろう。識者の御教示を受けたい。

註17 『都の錦獄中獄外』(下)、『国語・国文』17・10)

註18 『江戸文学研究』所収

註19 『徳川実紀』。この条については、『徳川実紀』・『寛政重修諸家譜』・『徳山藩再興史』などを参照されたい。

註20 『徳山略記』

註21 岩波文庫『見聞談叢』解説

註22 この棲息堂については、宝永五年重陽日と記された東涯の「棲息堂座右箴」が『紹述先生文集』巻十二に収められている。

註23 『徳山略記』

註24 『文集』巻之二十五に

紹介

伊地知鉄男校注 「連歌集」

戦争中に「宗祇」(昭和十八年・青梧堂)の一卷を世に問うて、連歌研究史に労作を加えられた著者は、ここに「連歌集」を発売して、戦後連歌研究の一時期を画された。厳密な本文校訂と詳細明瞭な頭注とは本書

宝永戊子三月八日午後左京師小路油小路民家伊勢屋失火……及明九月未時一風十三時而熄予時携弟長英謁毛利侯于大坂

註25 『徳山雑吟』所収

註26 『徳山雑吟』跋

註27 長沼玄珍の側から調査してゆけば義端に関する新資料も発見出来るかも知れないが、長沼家が現在どうなっているか不明である。御教示いただければ幸いである。

附記

本稿を作成するにあたって、天理図書館・山口県立図書館・徳山市立図書館その他にひとかたならぬお世話になった。深く感謝します。

の一大特色であるばかりでなく、まさにこの道研究者の待望の書といわなければならぬ。文学が言語芸術であるという意味において、連歌は、こゝろにその典型といつてよからう。日本独自の文学形式をもつ連歌の読解と鑑賞のために本書こそ最良の案内書となるであろう。所収作品は、八菟玖波集抄・新撰菟玖波集抄・水無瀬三吟何人百韻

注V、解説では、八賦物Vから説きおこして連歌の史的考察をつづり、諸本および作家の解説に及んでいる。校註者の研究成果も随所に提示しており、謙虚な筆致のうちに学問への厳しさもひしひしと感ぜさせてくれるものである。(日本古典文学大系・岩波書店刊・六五〇円)